

4月から伊達市に新しい県立高等学校が誕生する。福島県立伊達高等学校である。生徒数が年々減少している中で、新しい高校ができるということは、なくなる高校もあるということである。それが、共に100年の歴史を誇る梁川高校と保原高校である。

このような動きは、伊達地区だけではない。県内全体で見られるものである。県立高校改革前期実施計画に基づいて進められてきている。前期があるということは、後期があるということである。高校改革の波はまだまだ続く。

令和元年度と2年度に梁川高校に勤務していた。ちょうど新設校に向けて具体的に動き出すタイミングだった。百周年記念行事と梁川高校と保原高校の統合校の青写真を描くことが、私に課せられたスペシャル・ミッションだった。どちらも重かったが、特に新しい高校を創る作業は、責任重大である。

この前、伊達高校の2023年度入学生用パンフレットを手にした。そこには、私が梁川高校にいた2年間のうちに決められたことが、そのまま反映されていた。教育目標、教育方針、校訓、そして3つのコース名称などである。どれも大切なものばかりで、当分の間は、変わらないであろうものばかりである。新しい高校を形作る土台となるものである。

あの2年間で、このような重要なことを考えていたのかと、今更ながらこわくなった。新しい学校のコンセプトは、地域の未来を創る人材育成である。伊達市唯一の県立高校としての使命を果たすことである。

高校には「校訓」というものがある。いろいろと考えた。保原高校としては、「和衷協同（わちゅうきょうどう）」という校訓をそのまま引き継ぎたいとのことだった。いろいろと調べた。本も読んだ。新しい学校に合う言葉を探した。「学知利行（がくちりこう）」と「開心見誠（かいしんけんせい）」という言葉と出合った。「これだな」と思った。校訓というものは、あまり聞いたことがない言葉なのだが、その言葉からだいたいの意味がわかるようなものがよい。読んだときの響きも重要な要素である。

コースの名称も考えた。こちらは、3つのコースごとに、その概要は決まっていた。そこに合うような名前を考えるわけである。今時というわけではないが、横文字の方がよい。すなわちカタカナである。第一次案から検討を重ね、最終的に決まったのが「進学キャリアコース」「地域キャリアコース」「ビジネスキャリアコース」である。コース名は、志願者に直接影響を与えるものである。校名以上に大切なものである。

私が去った後に決まったものは、校名、校歌、制服などである。制服の展覧会には出かけた。今時の制服事情がよくわかった。伊達高校の制服は、今時の紺色のブレザーになったようである。校名はというと、無難に伊達高等学校に落ち着いた。

普通科1学年6学級240名の規模だが、定員が埋まるのはむずかしい。そのくらい、生徒数が毎年減少している。高校改革の波は避けては通れない状況である。一つの地区から県立高校がなくなってしまうのは、さびしい限りである。地元には、その高校の卒業生がたくさんおり、活躍している。地域を支えている。伊達高校には、伊達地区の発展を担う人材を育成するという責務がある。関わったものとして大いに期待している。